

## VI 様々な形の物語

ボンボニエールの様々な形。日本の伝統文化や金工産業の技術力の高さを外国に広報する役割を担った。

### 掌上の外交官

ここまでご紹介したようにボンボニエールは饗宴ごとにオリジナルなデザインで制作されていた。しかし実は、年代や祝宴名が特定出来ない特殊なカテゴリーに属しているボンボニエールがある。

それは外国大使をもてなす際などに配られたもの。こういった比較的小規模な晩餐会や午餐会では、予め意匠を決め発注し、作り置きしていたストックのボンボニエールを使用していたのである。また小宴の際は数種類を数個ずつ配布しているので、同じ小宴に列席していたとしても、持ち帰ったボンボニエールは個人により異なり、さらには異なる小宴に出席していても、同種同形のボンボニエールを所有する人がいたのである。

こういった作り置きのボンボニエールは兜、諫鼓鶏、牛車、駕籠、御座船など、いずれもいかにも日本的と言える意匠であった〔図①～⑧〕。皇室は外国賓客が日本的な意匠のものを好むことをよく理解しており、このような意匠のボンボニエールを外国賓客が持ち帰れば、日本の文化や伝統工芸の技術力の高さを広める役割を担うことが出来ると考えたのであろう。

ボンボニエールは掌上の外交官でもあった。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

### どこが開くの？

ボンボニエールは菓子器である。なので、どこかが開いて、金平糖などの菓子が入れられなければならない。しかし中にはどこが開いて菓子が入るのか、わかりにくいボンボニエールも存在する。

その筆頭は複葉機形〔図⑨〕であろう。このボンボニエールは朝香宮孚彦王の成年式のものである。孚彦王は大正元年(1912)に誕生。学習院初等科卒業後陸軍士官学校に入学し、昭和8年(1933)に卒業。元々飛行機が大好きで、航空科配属を希望していたが、皇族が飛行機に乗るのは危険と言われ、歩兵となった(5頁参照)。昭和18年に漸く陸軍航空本部に転科となり、大空を自身で操縦桿を握って飛ぶという念願を果たした。その孚彦王の昭和7年の成年式の際のボンボニエールが複葉機形のものとなる。それにしても、金平糖がいくつ入るのか？〔図⑩〕。

もう一つも飛行機関連のもの、プロペラ形〔図⑪〕である。このプロペラ形には悲しい物語がある。朝香宮孚彦王以前に「空の宮様」と呼ばれていた皇族がいる。山階宮武彦王である。武彦王は、明治31年(1898)に誕生した。大正4年海軍兵学校予科入学し卒業後は海軍に入り、当時入隊希望者の少なかった海軍航空隊に入隊、皇族で初めて東京上空を飛行した。大正11年7月19日に賀陽宮佐紀子女王と結婚。翌年懐妊中であつた佐紀子女王は暑い東京を避け、賀陽宮家鎌倉別邸に滞在していた際に関東大震災に遭遇した。佐紀子女王は居間の欄間の下敷きとなり、お腹の中の子共々圧死した。まだ20歳という若さであった。1年前に結婚したばかりの妻とまだ見ぬ我が子を同時に亡くした武彦王の悲しみは想像を絶する。武彦王はその後、徐々に精神を病んでいった。

武彦王は大正14年3月に民間パイロット養成機関「御国航空練習所」を立川の陸軍飛行場の一部に自費にて創設し、翌大正15年3月には第一期生が誕生した。その際の記念として作られたのが、プロペラ形のボンボニエールである。しかし、武彦王の病状が悪化し創設した練習所へも赴けなくなった。そして同年7月5日、御国航空練習所は短い幕を閉じたのである。



⑨



⑩



⑪



⑫

①御座船形 ②軍扇形 ③諫鼓鶏形 ④鎧兜形 ⑤牛車形 ⑥香炉形 ⑦駕籠形 ⑧武家兜形 ⑨⑩複葉機形(朝香宮孚彦王成年式) 昭和7年 ⑪⑫プロペラ形(御国航空練習所第一期操縦員修了記念) 大正15年 【②④⑫は個人蔵、ほかは当館蔵】

## Ⅶ 様々な材質の物語

ボンボニエールと言えは「銀」というイメージだが、実は様々な素材で制作されている。

### 漆

漆のボンボニエールには日本的な繊細の美が感じられる。大正の初めには家が途絶えてしまった有栖川宮家の美しい漆の小箱が遺る〔図a〕。



a

江戸時代より続く名門の宮家であり、天皇家の書道師範の家でもあった有栖川宮家。熾仁親王は明治政府の基本方針・五箇条の御誓文を揮毫。その子熾仁親王は戊辰戦争の将であり、明治政府において重要な職を歴任した。明治28年(1895)の死去に際して有栖川宮家を継いだのは弟の威仁親王である。

威仁親王は16歳から28歳までをほぼ外国で暮らしており、国際感覚を身に付けていた。明治24年に来日中のロシア帝国の皇太子(後のニコライ2世)を警察官が切りつける事件(大津事件)が発生。接遇を担う威仁親王は即座に適切な対応を取り、強国ロシアを怒らせずに事態を收拾したことで有名である。

外国通の威仁親王は、ボンボニエールもかなり早い段階で導入している。明治26年に来日したベルギー特命全権公使夫人エアノーラ・ダヌタンは、「デザートのように、有栖川宮家の家紋が金漆で描かれた黒い漆塗りの美しい小箱が、その日の記念に各人に贈られた」「恒例の綺麗な漆塗りの箱が私たちに贈られた」と度々日記に記しており、この頃の有栖川宮家の饗宴では、「漆塗りの美しい小箱」が配布されていたことが確認できる。

### 七宝

七宝焼とは、銀や銅などの「金属」の表面に色とりどりのガラス質の釉薬をのせて焼き付けたもので、紀元前の古代メソポタミア文明や古代エジプト文明にすでに存在した。日本では天保3年(1832)より七宝焼が広く作られるようになった。

日本の七宝焼が世界に知られることになったのは、明治6年のウィーン万博。以来、各地の万博に日本から多くの七宝焼が出品され、その巧妙さ・精美さで、世界的に高い評価を受け、ジャポニズムブームの中、明治期の主要な輸出産業となった。皇室でも贈答品に多く用いた。

昭和4年10月7日に昭和天皇第三皇女・孝宮和子内親王の命名祝宴が開かれた。その際のボンボニエールは文庫形葉菊文。七宝の美しいボンボニエールである。このボンボニエールには葉菊文描写技巧が異なる2種類があることが確認されている。1種は素地の上に金属線で模様を描き、そこに異なった釉薬を入れて焼き付けることで図柄を作る有線七宝。もう



d

1種はさらに釉薬を重ねることで、立体的な表現が得られる盛上七宝である〔図d〕。二つの業者に発注したことでこの差異があるのか、または渡す相手により差をつけたのか、真相は不明である。

### 陶磁器

陶磁器製のボンボニエール、その初見は、三笠宮崇仁親王・高木百合子の結婚に際し、貞明皇后から贈られたものになる。戦争が長期化してきた昭和15年(1940)、軍事色は濃くなり、日常生活においてさまざまな制限が出、また物資の不足も顕在化してきた。そういった中、同年7月7日に施行されたのが、宝石や銀製品などの製造・加工・販売を禁止した、いわゆる贅沢禁止令(奢侈品等製造販売制限規則)である。このため皇室の方々であっても、銀でボンボニエールは作れない状況となった。

崇仁親王・百合子妃は昭和16年に結婚した。御慶事であるのだから、当然ボンボニエールを作ることになる。だが、銀では作れないため、見た目はさほど銀とかわらないジュラルミンで制作した。そして貞明皇后がお二人を招いて開いた内宴で配られたのが、陶磁器製のボンボニエール〔図b〕である。おめでたい末広がりの扇形の蓋面には、宮家名の由来となった奈良の三笠山と崇仁親王のお印「若杉」、百合子妃のお印「桐」が描かれている。扇のかなめの部分には銀彩で菊御紋を配す。身の側面には唐草と鳳凰が彩り鮮やかに描かれている。銀で制作出来なかった分、思い切り華やかにデザインする、との意気込みを感じる作品である。

お二人には昭和19年4月26日に最初のお子様誕生した。戦争が激しさを増し、身重の妃殿下は沼津の御用邸東附属邸に疎開、そこで甯子内親王は誕生した。内親王御誕生に際してのボンボニエール〔図c〕も、時代を反映しての磁器製である。白い磁胎の鶴は、親子の情愛を示す巢籠鶴形。掌にそっと置きたい、愛しい一品である。



b



c

### プラスチック

このボンボニエール〔図e〕は順宮厚子内親王が学習院女子高等科卒業記念の茶話会に際して、同級生に贈ったものである。厚子内親王は昭和6年3月7日に昭和天皇・香淳皇后の第四皇女として誕生した。学習院初等科、学習院女子中等科・高等科に学び、昭和24年に卒業。学習院女子短期大学に進み、卒業後に元岡山藩主・侯爵家の池田隆政と結婚した。全体は緑色で、蓋部分は透明クリスタルのような仕様になっている。その蓋部に厚子内親王のお印「菊桜」があらわれている。桜は八重桜で、学習院女子中・高等科の校章でもあるので、皇室と学習院を表しているようにも見える演出である。



e

(2~7頁/学芸員 長佐古美奈子)